

隨泉寺寺報

平成 24 年（2012 年）7 月号 第 503 号

Tel 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

安居会法座

講師 明寶寺住職 藤井 晃師

講題 『仏教のこころ』

安居会法座 - 【安居とは元々、梵語の雨期を日本語に訳したもの】 -

本来の目的は雨期には草木が生え繁り、昆虫、蛇などの数多くの小動物が活動するため、遊行（外での修行）をやめて一カ所に定住することにより、小動物に対する無用な殺生を防ぐ事である。後に雨期のある夏に行う僧侶の勉強会の事から、夏安居（げあんご）、雨安居（うあんご）とも呼ばれるようになった。

昨日、中野も梅雨の雨が本格的に降り続けました。紫陽花もずいぶん咲いて、雨に打たれた風情もなかなかよく似合う感じでした。先日、蛍が鉦取り広場でも見えると坊守が聞いて帰りました。早速見に行きました。なんと寺橋から平原橋の間で十数匹飛んでいました。普段は車の光で見えませんが、眼を凝らしてみるとポーと薄い灯りをともしています。川の流れがきれいになってきたのでしょうか、ふわふわと光を点滅しながら飛び交っている蛍にすっかり感激してしまいました。



私のほたるの思い出は、幼い頃、両親と一緒にいった蛍狩りです。最後にたった一軒あった小さな店でラムネを買ってもらいました。そのおいしかったこと。麦わらで作った蛍籠の中のほたるの幻想的な光。そして父と母のやさしいくもり。初夏の夜、飛び交うほたるを思いながら、おかげさまで ・ありがとう。

7月の法座予定

- 7月8日.....掃除 平原東
- 7月14日昼席午後1時より.....安居会法座
- 7月15日朝席午前10時より.....門信徒の集い おとき
- 7月15日昼席午後1時より.....安居会法座
- 8月 2日午後6時より.....門信徒会本部役員会

☆ NHK ドラマ【49日のレシピ】の原作を読んで

作者がこの「四十九日のレシピ」を思いついたのは、親の法事に出席した時だったそうです。そこで、「四十九日の法要が、死者の魂があつた世へ旅立つ用意をしている期間に行われるもの」という僧侶の言葉が作品作りのきっかけになっています。四十九日というのは、亡くなった人があつた世へと旅立つための準備期間なのではないでしょうか？

しかし、この作者の意図は、読んでいて強く感じたのは、亡くなった方が旅立つための準備ではなく、残された者達があつた世へ行く人を送りだせるようになるための準備期間なのだなあ、という気持ちでした。

実際に広告のキャッチコピーは「わたしがいなくなっても、あなたが明日を生きられるように。大切な人を亡くしたひとつの家族が、再生に向かうまでの四十九日間。」という言葉が記されています。

最愛の妻を亡くして呆然としている夫の元に訪れる人々。亡き妻から四十九日までの間、残された夫の世話を頼まれたという少女の出現が、この物語の軸です。大切な人を亡くしたのですから、もちろん四十九日で整理ができるわけではありません。けれど、区切りをつけることはできるはず。そう思わせてくれる一冊です。

この本を手取る時、私の中にあつたのは、茫漠とした疑問です。「もしも、大事な家族を亡くしてしまう事態になったら、どうなってしまうのだろうか？」そんな疑問の中で読み始めたのに、読後に私が感じていたのは「癒し」でした。少しファンタジーな味付けがあり、生々しい死出の旅立ちとは少し違います。けれど、そこの脈々と流れているのは、人を思いやる心。大きな悲しみを包むやさしさ。実は、それって生きていることも、死んでることも関係なく存在しうるものだと、気づかされます。

もちろん、死んでしまう前に準備を整えておくことも大事でしょう。物語の中で亡くなってしまった奥さんは、立派に死出の旅立ちを心がけていたと思えました。準備をしていなくても、伝わる愛情は見つかると思えますが、できれば、私はなにがしかのメッセージを残しておきたいと思ってしまいました。それが、残された家族の再生を早くするのなら、なおさらです。また49日法事の意味も重要です。亡くなった人の生前の生き方、身の処し方などをしっかりと受け止める大きなチャンスです。何を大事にして、何を抛り所としたのか、それを考える。そうした意味でご法事というものが大切です。

タイトルにもなっている『レシピ』ですが、作中で亡くなった妻の料理方法というそのものズバリのレシピから、家事の仕方まで多岐にわたりました。どういう生活をしてきたかというメモ書きのようなものです。家事のレシピとも言うべきものでした。

私も死んだ後の『レシピ』処方箋のようなものを書いておくことも、必要なことだと思いました。

☆御礼

永代経懇志 金 貳拾萬円 木村 幸子殿 故 鈴木 郁子様 特 永代経志として



7月 東井 義雄

子どもこそは おとなの父

子どもこそは いのちのふるさと

子どもがいうことを聞いてくれないとか、思うようにならないとかというお母さん方の愚痴を聞くことがよくあります。

しかし、子どもがいうことを聞かないとか思うようにならないとかということは、ほんとうは、困ったことではなくて、素晴らしいことだといっているのではないのでしょうか。

思うようにならないということは、子どもは物体ではないということです。生きていくということです。しかも、子どもは、ただのいのちを生きているではありません。

人間のいのちを生きているのです。感じたり、思ったり、考えたり、意志したり、意志して行動したり・・・という人間のいのちを生きているのです。

相手が子どもだからといってバカにすることは許されません。幼い子どもでも、素晴らしい いい子の芽をいっぱいもっているのです。おとなが、おとなの思いあがり捨て、捧む心で接するとき、子どものいのちは、おのずから、光りながら育ってくれるのです。

幼児教育学級の若いお母さんたちと、子どももっている美しいものについて感動体験などを話しあったことがありました。そのとき、

いかに健康そうな若いお母さんのおっしゃったことばが忘れられません。

わたしは、いつも元気なんです、ある日珍しく疲れを出して床に伏せておりました。ところが、わたしが叱ってもたたいても、わたしのいうことなんか聞こうともせず、いつもわたしを困らせている男の子が保育園から帰ってきました。いつもなら、わたしのことばなんか聞こうともせず、かばんをほうり出して遊びにとびだしてしてしまうのですが、わたしが寝ているのを見ると、心配そうに寄ってきて、わたしの側に寄り込んでしまいました。そしてわたしに寄りそって、「お母ちゃん、元気だせや」「お母ちゃん、元気だせや」と励ましてくれるのです。わが子なればこそ、こんなかわいいことをいってくれると思うと、涙が出てきて、「あんた好きなもの、買ってきな」と、十円 一個やりましたら、それを握って一目散にとび出していきました。しばらくすると、チャイナーとかいうあめみたいなものを一個買ってきました。自分でなめるのかと思っていましたら、「お母ちゃん、ねぶれや (なめなさい)」「お母ちゃん、ねぶれや」



と、無理やりに、わたしの口の中に突っ込んでくれるのです。

親というものが、こんなにしあわせなものであったかということ、疲れを出したおかげで、わが子に教えてもらいました。

そういわれるお母さんの目には、涙がいっぱい光っていました。

子どもは、ただのいのちを生きているではありません。人間のいのちを生きているのです。感じたり、思ったり、考えたり、意志して行動したり・・・という人間のいのちを生きているのです。相手が子どもだからといってバカにすることは許されません。幼い子どもでも、素晴らしいいい子の芽をいっぱいもっているのです。おとなが、おとなの思いあがり捨て、捧む心で接するとき、子どものいのちは、おのずから、光りながら育ってくれるのです。

七夕伝説・・・。

夜空に輝く天の川のほとりに、天帝の娘で織女と呼ばれるそれは美しい天女が住んで居ました。織女は、天を支配している父天帝の言いつけをよく守り、毎日機織りに精を出していました。織女の織る布はそれはみごとで、五色に光り輝、季節の移り変わりと共に色どりを変える不思議な錦です。

天帝は娘の働きぶりに感心していましたが、年頃の娘なのにお化粧一つせず、恋をする暇もない娘を不憫に思い、天の川の西に住んでいる働き者の牽牛という牛飼いの青年と結婚させることにしました。

こうして織女と牽牛の二人は、新しい生活を始めました。しかし、結婚してからの織女は牽牛との暮しに夢中で毎日しゃぎまわってばかり。機織りをすっかり止めてしまったのです。

天帝はすっかり腹を立ててしまい、2人の所へ出向くと、「心得違いをいつまでも放っておく訳にはいかない。再び天の川の岸边に戻って機織りに精を出しなさい」更に付け加えて・・・「心を入れ替えて一生懸命仕事をするなら1年に1度、7月7日の夜に牽牛と会うことを許してやろう」と申し渡しました。

織女は牽牛と離れて暮すのがとても辛く涙にくれるばかりでしたが、父 天帝に背く事もできず、牽牛に れを告げると、うな垂れて天の川の東に帰って行きました。それ以来、自分の行いを反省した織女は年に1度の牽牛との再会を励みに、以前のように機織りに精を出すようになりました。

牽牛も勿論思いは同じ、働いて働いて・・・7月7日を待ちました。こうして、牽牛と織女は互いの仕事に励みながら、指折り数えて7月7日の夜を・・・。

楽しいときはすぐに過ぎて行きます。 れは必ず来ます。しかしこうして遇える日があればいいですね。 法事というのは会いたい人に遇える日なのかもしれません。

